

(3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryu UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないこと。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けること。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下とすること。

NITS・教職大学院・教	実施機関名・連携機関名 常葉大学大学院 学校教育研究科
育委員会等	事業名：【NITS・常葉大学教職大学院コラボ研修】 教師自身の「主体的で対話的な学びの場」となるコラボ研修
コラボ研修プログラム	身近にある人権問題とこれからの人権教育
支援事業報告書	開催日時：令和8年1月22日(木) 13時50分～16時30分 開催場所：常葉大学(静岡県静岡市駿河区弥生町6番1号) 参加人数(総数)と参加者の属性：(37人) 一般教員4人、行政職員1人、一般市民1人、大学生2人、 大学院生22人、大学教員5人、大学職員2人

目的：

- 1 参加者にとって「主体的で対話的な学びの場」となる研修を目指す。
昨年度と同様、「教師自身の「主体的で対話的な学びの場」となるコラボ研修」をテーマとし、グループワークを活動の主軸とすることで、参加者を主語とした研修を目指す。
- 2 参加者が身近にある人権問題に気付くとともに、これからの人権教育の在り方について考える場とする。
静岡県人権・地域改善推進会副会長の古山登章氏を講師として招き、ニュース等で取り上げられている話題を人権の視点から読み解くとともに、学校等における人権教育はどうあったらよいか、グループ協議等を通して考える場とする。

内容：

- 1 グループの顔合わせ
開会行事終了後、研修への参加目的別に分かれた4～6人のグループで、研修目的や研修に期待すること等を交えながら互いに自己紹介を行った。
- 2 講師の講話
「身近にある人権問題とこれからの人権教育」というテーマで、静岡県人権・地域改善推進会副会長の古山登章氏の講話を伺った。子供同士のいじめ、児童虐待、ヤングケアラー、冤罪事件、同和問題等、幅広い視点から人権問題を捉えるとともに人権教育の在り方について考えるきっかけを得た。
- 3 グループ協議
講師の講話を受け、研修への参加目的に基づいて構成されたグループごと、人権問題について情報交換するとともにこれからの人権教育について意見交換をした。参加者の年代によって人権の捉え方に差異が見られたが、それが協議を活性化させる要因ともなった。
- 4 グループ発表
グループで話し合ったことを発表した。「まずは人権について知ることが大切」というような初歩的な意見から、「人権は水や空気のようなもので、不可欠だが特別なものではない」という示唆に富んだ意見まで出された。
- 5 講師の講評
グループ発表を受け、古山氏が講評を行った。「人権問題は難しいからと言って、他人の判断に委ねてしまうというのが一番いけない。自分で判断できる力をつけていただきたい」という貴重なアドバイスをいただいた。講師講評の後には閉会行事を行い、研修を閉じた。

成果：

- 1 人権問題について理解を深めることができた。
(参加者の声)・同和問題やえん罪等、初めて知ったことが多い。今後の生活や学校現場につなげたい。
・人権は様々な視点から捉えることができる。人権を大切にすることの意義を知ることができた。
- 2 人権教育にどう取り組んで行ったらよいか考えることができた。
(参加者の声)・改めて考える機会をいただいた。学校は人権教育を進める最高の場であることを再確認した。
・日々、校長として各担任の指導を見ていると、命、人権、教育効果の順が守られていないことを感じる。本日の貴重な時間をきっかけに、今後の経営に生かしていきたい。
- 3 人権という視点を通して自身の生き方を問い直すことができた。
(参加者の声)・差別や偏見はよくないと分かっている自分も知らないうちにやっつけてしまっているかもしれないということに気付き、自身の考えを見直さなければならないと感じることができた。自分の生き方を考えることにつながった。

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

1 普段扱わない内容をテーマとすることの意義

人権をテーマにした今回の研修の中で、「同和という言葉を始めて知った」という大学院生の声があった。同和問題についてはナイーブな側面があり、これまでの大学の授業でもあまり触れる機会がなかったようだ。しかし現実問題として、県内にも同和地区は存在しており、そのような地区に赴任した教員にとっては、他人事では済まされない。普段扱わない内容を研修会のテーマとして設定することの意義を再認識した。

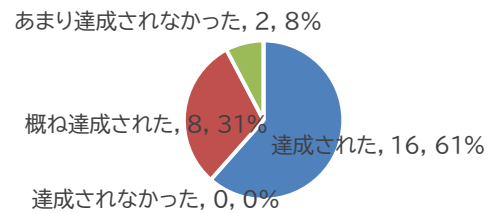
2 じっくりと講師の話に耳を傾けることによる

最近の講師講話では、スライド（プレゼンテーションソフト）を用いることがほとんどだが、今回の講師は紙による資料を基にして話を進めていった。スライドの場合には、講師の声よりもプロジェクターの映像に意識が行ってしまいがちなところがあるが、映像がない分、講師の顔を見たり、手元の資料に目を落としたりしながら講師の話の姿があった。スライドを用いない講話は、それを用いた通常の講話よりもじっくりと講師の話に耳を傾けることができるのではないかと感じた。

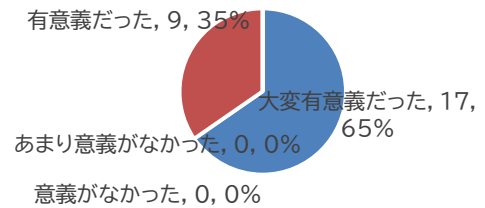
3 異質の参加者がディスカッションすることの有用性

グループワークの有意義性について、特に高い評価が得られた。これは、講話による問題提起により、グループ協議への意識が高まったこともさることながら、グループ協議の参加者が異質であったことによる部分も大きいのではないかと感じる。つまり、同和問題をはじめとする人権問題は、現職教員と学生とでは大きな認識の違いがあり、そこを埋め合わせる必要が生じ、否が応でも活発なディスカッションが生起されたのである。特に大学生や大学院生が、年長の現職教員に質問をする姿が多々見られた。

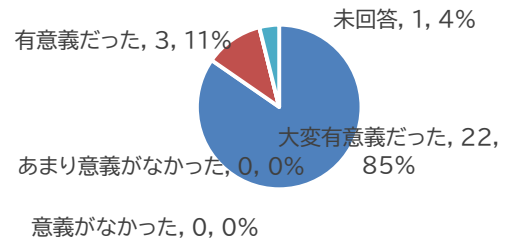
参加目的の達成度



講話の有意義性



グループワークの有意義性



アイデアや工夫したこと：

1 研修への参加目的を事前に聴取し、研修実施後は、その目的に応じて振り返りをしてもらったこと

本研修に参加する参加者の意識を高めるとともに、主催者として参加者のニーズを確認するため、事前に一人一人から研修への参加目的を聴取した。また、その状況を研修実施前に講師にも伝え、講話に生かしてもらえようとした。参加者の研修への参加目的は下記の通りである（大学教員分は含まず）。

- (1) 身近にある人権問題について知りたい。（6人）
- (2) 授業等をはじめとする日々の教育活動に生かしたい。（14人）
- (3) これからの人権教育について考えたい。（9人）
- (3) 研修を機に、自身のキャリアアップを図りたい。（3人）

この参加目的の達成度については、上欄に示したとおりである。

2 参加目的別に分けたグループによるグループワークを活動の主軸としたこと

グループワークを活動の主軸にし、講話もグループワークの中に組み入れる形にした。加えて、講話の前に、グループ内で互いに自己紹介する場面を設定した。それにより、グループとしての親密度が高まり、講話後のグループ協議にもスムーズに入っていくことができた。また、同じ参加目的の者でグループを組んだことにより、グループ協議でも、より具体的でつこんだ話し合いをすることができた。また、グループ内での話し合い内容を確認しながら記録するツールとして、円形ホワイトボード（えんたくん）を用いた。これは、グループ発表の際に、全体への提示資料としても活用できた。



講師講話の様子



グループ協議の様子



グループ発表の様子